

太宰治『走れメロス』の世界

——義人メロスの死と再生——

丹羽 章

目次

- 一 往還
- 二 裁く者
- 三 苦悩する者
- 四 義人の死
- 五 許す者
- 六 「愛と信実」の可能性

一 往還

主人公が登場する。主人公がいかなる存在であり、いかなる状況に置かれているかが語られる。ついで、何らかの事情で別の場所に移動した主人公が、そこで予期せぬ事態に直面し、未知の経験をする。その結果、主人公に何らかの重要な変化が生じ、登場した時とは異なつた存在となつて、最初の場所に戻ってくる。

以上は最も普遍的な物語の構造の一つであろうが、『走れメロス』¹もまたこの構造を持つ作品である。作品冒頭、古代ギリシャ、シラクスの都に登場した牧人メロスの実存は、故郷への往還の過程で大きく変容する。私見によれば、メロスは、最初に登場した時とは、ある意味で正反対の人間となつてシラクスの都に戻ってくるのである。そしてディオニスは、帰つてきたメロスの中に、彼が求めていたものを見出し、救われる。したがつて考察すべきは、最初にメロスがどのような存在として登場するか、そして、いかなる経験を経て、どのような存在として戻ってくるか、そしてその帰ってきたメロスがディオニスに、ひいては我々読者に開示する人間的可能性とは何か、ということではなければならないだろう。

二 裁く者

冒頭、メロスの登場はまことに鮮やかに彼の本質を提示している。「メロスは激怒した」。即ち、メロスは何よりも「激怒」するような人間として登場しているのである。むしろメロスが「激怒」するのは王が「人を殺」すからではない。メロスにとって、人を殺すこと自体は必ずしも悪ではない。なにより彼自身が王を殺しに行くのである。メロスが激怒するのは、王が「人を、信ずる事が出来ぬ」と言う存在だからだ。メロスにとって「人の心を疑ふのは、最も恥づべき悪徳」である。したがつて「人を、信ずる事が出来ぬ」人間は、唾棄すべき悪人、罪人なのだ。メロスはそのような人間に生きる資格はない、と考える。正義に反する存在は「除かなければならぬ」。「生かして置けぬ」人間なのであ

る。だから殺しに行く。殺すことは正義の行為なのだから罪意識などかけらもない。激怒して、何のためらいもなく殺す。それがメロスである。即ち、冒頭のメロスは〈裁く者〉であり、〈正義の名の下に人を殺す者〉として登場するのである。

メロスが〈罪人〉を躊躇なく裁くことができるのは、彼が自らの〈義〉を確信しているからである。王との問答を見ても、あるいは故郷に帰った彼が披露宴の席で妹に贈った言葉からもわかるように、メロスにとって、自分が「人を疑ふ事」や「嘘をつく事」は、あり得ないことであつた。むろん、約束を破ることもありえない。それはメロスにとって自明の前提である。彼は自らが悪に染まる可能性、罪を犯す可能性を認めない。彼は自らを、罪なき者、〈義人〉であると確信している。ゆえに裁く資格がある。それはメロスにとって反省をさしはさむ余地のない自明の事実であつた。この徹底した自己義認が、冒頭のメロスの特質である。メロスは〈自らを義とする者〉であり、それゆえに〈裁く者〉としてふるまうことができる人間なのである。

メロスが〈義人〉であることは、彼自身の確信であるとともに、ある程度衆に知られた、世間的評価でもあつただろう。祝宴の席で妹に「おまへの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまへもその誇りを持つてゐろ」と言い、妹婿に「メロスの弟になつたことを誇つてくれ」と言えたのもそのためだつたろうし、妹や妹婿も、たとえ「今宵呆然、歡喜に酔つて」いたにしても、兄の言葉を、特段の違和感もなく受け容れている。冒頭シラクスの都での老爺との会話、あるいは最終場面でのフィロストラトスとのやりとりを見ても、彼が一定の権威ある者として振る舞い、また認められている様子うかがえる。ましてや親友ともなれば、互いに義人であることをもつともよく認め合う仲であつただろう。したがって、メロスにとって、いかなる状況であろうとも、友が彼を信頼するであろうことは疑問の余地のないことであつた。それゆえメロスはためらうことなくセリヌンティウスを人質に差し出すし、友が彼を信頼することも、当然の事として受け止めるのである。要するに、冒頭のメロスは〈義人〉である。それは彼自身の確信であり、その自己義認はおそらく世間の承認によつても支えられている。

三 苦悩する者

では、メロスに誅殺されるところであつたディオニス王とはいかなる男であつたか。

「人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」

ディオニスが言っているのは、人間には自分の命より大切なものがないという事である。だから日頃どんな美しいことを言つていても、いざとなれば自分がかわい。自分の命を守るためなら何をしても許されると考える。ゆえに人は必ず裏切る。人を信じるのは愚かなことだ。これは、少なくとも我々近代人には普遍的に共有されている一般的知であるといつてよい。我々は「信じない事を誇りにして生きてゐる」^③し、「お互ひの不信の中で、エホバも何も念頭に置かず、平気で生きてゐる」^④（傍点原文通り）であろう。ディオニスは我々近代人の観点から見ても、常識的に正しいことを述べているにすぎない。

しかし、ただ一つ、ディオニスが我々とは異なっている点がある。それは彼が、人を信じられぬということに苦悩している点である。「その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたやうに深かつた」という。彼は明らかに、少なくともかつては、愛と信実を求める人間であつただろう。そして人と人との間に愛と信実がありうるということを、確かな事実として確かめようとしたのであろう。彼の求める「平和」は、おそらくその事実の上にしかありえなかつたからである。そして、その都度、裏切られたのである。「疑ふのが、正当の心構へなのだ」と、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ」とはそういうことを意味していた筈である。王の知が「邪智」だとしても、それは裏切られ続けた経験が彼に否応なしに与えたものなのだ。ディオニスは、いかに求めても、己の「邪智」を超える事実に出会うことができなかったのである。

そう考えれば、ディオニスの本質は〈愛と信実〉を求めて裏切られた存在、〈苦悩する者〉であるといえる。そのへ

苦悩」に、ディオニスの高貴性がある。そしてそのようなディオニスを、生きる資格なしとして裁くのが、「愛と信実の血液」だけで心臓が動いていると称する〈義人〉メロスなのである。だから、メロスとディオニスは賭けを行うことになる。それは、「愛と信実」が、事実、存在するか否かをかけての賭けである。メロスは処刑まで三日間の猶予を乞う。その間に村に帰り、妹の結婚式を済ませ、三日目の日没までに王城に帰って来ると約束する。ディオニスには人間の愛と信実への絶望がある。だから言う。「ちよつとおくれて来るがいい」。彼の言うのはこういうことだ。お前は遅れて来るだろう。そして、間に合うはずだったが、予期せぬ出来事があつて、結果的に遅れてしまったのだと言うだろう。「おまへの心は、わかつてゐるぞ」。そうなれば、私はお前の友を殺し、お前を永遠に許してやろう。それがディオニスの「邪智」が見たメロスの正体である。一方、〈義人〉メロスにとつては己の信実を疑われること自体許しがたい侮辱である。是が非でも「人の信実の存するところ」を証明しなければならない。それは自らが〈義人〉であることを証明することでもある。かくして〈人間的愛と信実の実在〉を巡つての賭けは〈メロスの義〉をかけての賭けともなった。この二つの賭けに勝つたのはメロスなのか。ディオニスだったのか。そのことが問われなければならない。ただ、少なくとも第二の賭けに関しては、正しかったのは、むしろディオニスである。

四 義人の死

王城とメロスの村を隔てる距離は「十里」。それは、深夜王城を出発したメロスが、終夜「一睡もせず」、「急ぎに急いで」、「翌る日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事をはじめてゐた」頃になつてようやく到着するような距離、あるいは三日目、「薄明の頃」に跳ね起きたメロスが、一瞬「寝過したか」と思うほどの距離として設定されている。この「実際よりもはるかに遠い」距離のメロスによる往還は、二つのプロセスを持つと言ふことができる。まずはメロスが己を知るプロセスがある。次いで、彼が己を超えるものに出会つていくプロセスが語られるのである。故郷の村に帰つたメロスは妹婿を説得し、翌日には結婚式を挙げてしまう。この強引さも、己の義の絶対性を確信す

る人間だからこそのことであろう。かくて披露宴も深夜に及び、メロスにも出発してしかるべき時が来る。翌日の日没には余裕を持つて到着すべきであるし、往路と違って着いた後に特段の所要があるわけではないから、「急ぎに急いで」行く必要もない。その上天候も悪い。往路に要した時間を考えれば、披露宴からそのまま出発してもよい時刻である。メロスも出発を決意する。ここからメロスの還路となるのだが、それは義人メロスが、己の内なる〈己に背くもの〉に向き合っていく過程として、まずは始まるのである。

出発を迫られたメロスの中には「一生このままここにゐたい」という感情と、出発しなければならぬという義務感との葛藤が生まれる。この義務感が何に対する（誰に対する）義務として意識されているかが問われるところであるが、それは後に考察するとして、義務感に鞭打たれてようやく出発を決意したメロスがまず行ったことが〈出発の引き伸ばし〉であったことにひとまず注目したい。

あすの日没までには、まだ十分の時間が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考へた。

極度の疲労と安堵と酩酊の状態で、「ちよつと一眠り」すればどうなるかは自明であろうが、それでもメロスは寝てしまう。そしてもちろん、寝過ぎなのである。「南無三、寝過ぎたか」である。とはいえ、まだ「約束の刻限までには十分間に合ふ」し、寝過ぎしたのは意図的にしたことではないから彼の責任ではないということもできる。といって、これ以上出発を引き延ばす理由は、もはや見いだせない。ここで漸くメロスは出発し、走り出すのである。

走り出したメロスが次に行ったことは〈到着の引き伸ばし〉である。走り出したメロスは、走りたくないという感情と「走らなければならぬ」という義務感との葛藤に苦しむ。彼に走ることを強要する義務感の正体は後述するとして、ここで奇妙に思えるのは〈走りたくない〉メロスの「殺される」ことへのこだわりである。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救ふ為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走

るのだ。走らなければならぬ。さうして、私は殺される。

義務は果たさなければならぬ。しかし義務を果たしても、結局は殺されてしまう。しかしそれは初めからわかってたことのはずである。そもそもが「死ぬる覚悟で居」たはずのメロスが、なぜこの期に及んで「殺される」ことにこだわるのか。彼は何を気にかけているのか。メロスには何か気がかりなことがあつて、それゆえに「殺される」ことにこだわっているのである。そしてその「気がかり」は決して故郷への未練ではない。

ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練はない。妹たちは、きつと佳い夫婦になるだらう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。

何の気がかりも無い、と言っているのではない。「無い筈だ」というのである。ここで暗示されているのは、もはや故郷への未練もなく、〈義人〉メロスには何の気がかりも「無い筈」なのに、メロスにはなにか気がかりがあるという事である。この、メロス自身にも未だ明確に意識されない「気がかり」があるために、彼は出発したくなかつたのである。走りたくないのであり、殺されることにこだわらずにいられないのである。その気がかりの正体はまだ明らかではない。しかし、そのあげく、メロスは走るのをやめてしまうのだ。「そんなに急ぐ必要も無い。ゆつくり歩かう」である。彼は走るのをやめて、しかもことさらに、「ゆつくり」歩き出すのである。彼は出発を引き伸ばした。そしていまや到着を引き延ばそうとしているのである。そうしながらメロスは、彼の内に潜むもう一人の彼が望んでいる結果をもたらすであろう、何かを待っている。何かに期待している。もちろんそれは〈予期せぬアクシデント〉の勃発である。

川の氾濫に直面した時「太陽も既に真昼時」になっていたのは、メロスが出発を後らせ、到着を引き延ばしたからである。しかし彼はそのことに気付こうとはしない。むしろメロスは全力で濁流を泳ぎ切り、待ち構えていた山賊達をも打倒す。この時メロスは何の根拠もなく、山賊の出現を王の差し金と疑うのだが、彼はその自己矛盾にも気付かない。

そして峠を駆け降りたメロスは、そこでついに力つき、倒れるのである。もはや立ち上がることも叶わない。本来なら間に合うはずだったが、予期せぬアクシデントのために、全力を尽くしたにもかかわらず、結果的に遅れることになってしまう。メロス内部の〈己に背く者〉が期待していた、その通りの事態に立ち至るのである。

かくしてもはや動けなくなったメロスが次に行うのは、〈言い訳〉である。延々と繰り返されるメロスの言い訳の表現はまことに見事なものだが、ここまで執拗に言い訳を繰り返すのは、もちろん、うしろめたいからである。そして興味深いことは、走れなくなったメロスがまず最初に気に病んだのが、世間の評価だったことである。

私は、きつと笑はれる。私の一家も笑はれる。

やはりメロスは日頃から〈義人〉としてふるまい、〈義人〉として世間から評価されていたのである。そしてそれが彼の誇りだった。だからこそ今、その評価を裏切って、「笑はれる」ことを気に病んでいるのである。〈義人メロス〉という世間の評価は、メロスにとってそれほどまでに大切なものだったのである。そう考えれば、「走らなければならぬ」という義務感が何に對するものであったかも明らかにし、「さうして、私は殺される」ことにこだわらずにはいらなかった理由も理解できる。世間に対して〈義人〉としての義務を果たし、己の義を証明したとしても、世間の賞賛を受ける前に殺されてしまうとすれば、走ることに何の意味があるのか。メロス自身にも正体不明だった「気がかり」の意味は、もはや明らかであろう。激怒と昂揚から覚めてしまえば、〈義人メロス〉も、『お伽草紙』の「瘤取り」に登場する俗物「阿波聖人」とななら変わるところはないのである。

とはいえ、それでもメロスが苦しまずにいられないのは、セリヌンティウスに對する疾しさである。いくら弁解を繰り返しても、自分が何をしたかは自分が一番よくわかっていているからだ。親友を身代りにして生き延びる後ろめたさは募るばかりである。そこでメロスが最後にしたことは、セリヌンティウスの信頼をさえ疑い、ふてくされ、開き直る事だった。

君だけは私を信じてくれるにちがひ無い。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういつそ、悪徳者として生き伸びてやらうか。……（中略）……正義だの、信実だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。

ここに至つてついに、メロスの内なるもう一人の彼、ディオニスの「邪智」が見抜いた彼の正体が顕在化する。そしてメロスは、己が王の言つた通りの人間であつた事を知るのである。「今になつてみると、私は王の言ふままになつてゐる」のだから。王は正しかった。メロスは義人ではなかった。彼もまた、人を疑い、人を裏切る、一人の罪人にすぎなかつたのである。もはやメロスは己を義人とみなすことはできない。こうして、義人メロスは死んだ。そして一人の罪人が残されたのである。

五 許す者

しかしメロスは、義人メロスの死んだ地点から今一度立ち上がり、走り出す。否むしろ、メロスが何者にも強いられることなく、真に走り出すのはここからなのである。もはや義人ではなく、一人の罪人に過ぎないメロスがなぜ走るのか。そのように問う事は必ずしも正しくない。罪人であるからこそ走るのである。以下、そのこの意味を明らかにしなくてはならない。

走り出したメロスには、何よりもまず「信頼されてゐる」ことへの感動がある。彼はいまや自らが、信頼に値しない、一人の罪人に過ぎないことを知っている。ところが、その、信頼に値しない罪人を、にもかかわらず、信じて待つてくれている人がいる。そのことが未だかつて経験したことのないほどの感謝と喜びとしてメロスに経験される。そこから、その信頼にこたえたいというやみがたい望みが生まれる。そして、その望みをかなえる可能性が己にも残されているということが発見されるのである。人間はしよせん罪人に過ぎない。しかしその罪人にも、信頼にこたえたいと望み、決

意し、行動する〈自由〉と可能性とが与えられているのである。そのことがとてつもない喜びとして、メロスに経験されるのだ。その希望と喜びと感謝がメロスを走らせるのである。それは世間への義務感に強いられて走った、かつての〈義人〉メロスには持ち得なかった感動である。メロスは罪人としての自覚を持ったからこそ、己の自由意思で走ることができる存在になったのである。

それゆえ、刑場に帰ってきたメロスがセリヌンティウスと最初にしたことが、互いの罪を告白しあい、許しあうことだったのは、当然のことといえよう。後述するが、メロスのみならず、セリヌンティウスもまた、メロス往還の間、罪人としての自覚に達したと考えるべきであろう。だからこそ彼らは互いに許しあうことが出来たのである。そしてそのことによって再び、信じあい、愛し合う者となることができたのであった。かくして、人間的愛と信実とは許しあうことであり、真に罪の自覚に達した時、人にはそれが可能になることが開示される。メロスとセリヌンティウスは、そのような愛と信実を初めて手に入れた。それは彼らが「嬉し泣きにおいおい声を放つて泣いた」程の喜びとして経験されている。そしてディオニスも、その二人の姿に、人と人との間に、愛と信実が可能であることを、確かな事実として確認することができたのである。

〈義人〉として、〈裁く者〉として登場したメロスは、〈罪人〉として、〈許す者〉となつて帰ってきた。⁶ そのことによつて「愛と信実」を実現したのである。即ち、問題は罪を犯すか否かではなく、罪の自覚を持つか否かであった。そのことが人間の本質を分ける。人は罪を犯す。〈義人〉はいないのである。だからメロスは罪人であつて、〈英雄〉ではないし、〈英雄〉となつてはならない。それがメロスの「赤面」で作品が結ばれなければならなかった理由であると考えることができる。

六 「愛と信実」の可能性

人間的愛と信実が、事実存在するという、その可能性の根拠が〈罪の自覚〉であるとするれば、人間が、罪の自覚に

達し、それでもなお生き続けることが現実的に可能なのかという問題が、最後の問題として残ることになる。罪とは絶望である。そして人は絶望してなお生きることができない。だから人々は、生きるために、罪の自覚を回避している、そう考えることができる。そうであるならば、生きることを求める限り、人間には真に罪の自覚を持つことなどできないであろうし、そうである以上、人間的愛と信実も、結局は絵空事に過ぎないことになる。『走れメロス』の読後感になお空々しさが残るとすれば、罪意識を持つことなどできぬ、許すことなどできないという実感が背景にあると考えられる。しかし作品はこの問いにも一つの答を提示している。その答は、メロスが最後に走る過程で出会っていく〈己を超えたもの〉、「もつと大きい大きいもの」の性格と、その「大きいもの」とメロスが結ぶ関係の在り方を通して提示されていると考えることができる。

既述の通り、倒れたメロスを再び立ち上がらせ、走ることに促したのは、「待つてゐる人がある」「期待してくれる人がある」という感動だった。しかし、走り続けるメロスはやがて、待つてくれているその「人」の向こう側に、さらに大きな何者かを見るようになる。

「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと大きい大きいものの為に走つてゐるのだ。ついて来い！ フイロストラトス。」

その「大きいもの」の名をメロスは呼ぶことができない。それはかつての〈義人〉メロスが全く知らなかったものであり、己が罪人であるという絶望に倒れこんでいた彼に、初めて語りかけてきたものである。あるいは罪人の自覚を持った時、初めてその囁く声が聞こえてきたというべきかもしれない。

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。……（中略）……見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出てゐるのである。

遠藤祐氏はこの「大きいもの」に触れて、「私はそこに、唯一の《至上者》^{いとたかきもの}、地上に〈正義と信実と愛〉の行われることを求め、その実現のために力を尽くす人間を嘉する〈大きいもの〉のイメージを、想いうかべる」とされ、「メロスの行く手に清水を備えたのは、この「もの」であるに違いない」と指摘されている。傾聴すべきご指摘である。この清水の「囁き」に力づけられ、促され、走り出したメロスは、セリヌンティウスの向こう側に、自分に期待し、待つている、はるかに大きな何者かの存在を感じるのである。それは、罪に汚れた人間を、それでも許し、愛し、信頼し、期待しているなにかである。そしてメロスは、おそらくその「大きいもの」こそが、罪人にすぎない彼に、その期待に応えて走ることの出来る自由と可能性とを与えたものであることを感受している。だからこそ走らなければならないし、走ることができる。その喜びが、限界を超えて彼を走らせる。そのようにしてメロスは、「大きいもの」との関係を生きる存在へと変容していくのである。その事によってメロスは、罪人であるという絶望を自覚しつつ、なお、希望を持つて走り続ける、生き続けることの出来る存在となりえたのである。

メロスとセリヌンティウスが、刑場で互いに許し合い、愛し合うことができたのは、自分たちが、罪人であるにもかかわらず、何者かに許され、愛されている者であることを互いに自覚していたからこそであろう。セリヌンティウスはメロスが自らの罪を告白した時、「すべてを察した様子で首肯き」メロスを殴った。セリヌンティウスが「すべて」を察することができたとするれば、彼自身が、メロスを待つ間に、メロス同様の内的経験をしていたと考えるほかは無い。人間を超えた「大きいもの」との関係を生きる存在。それを宗教的実存と呼ぶことができる。そして、読者は、メロスやセリヌンティウスという宗教的実存の背後に、罪人であるという絶望がそのまま、にもかかわらず許され、愛され、救われているという宗教的歓喜の根拠となるような信仰を想起することができるし、〈凡夫〉であるという絶望が、直ちに、だからこそ救われるという救いの根拠となるような信仰を思い描くこともできるだろう。そのような信仰が〈事実〉可能であるならば、人と人との愛と信頼も、〈事実〉可能であるだろう。作品『走れメロス』はそのような地点までわれわれを導く。そしてそこから、今一度、問いかけてくるのである。

注

- (1) 一九四〇（昭和一五）年五月、『新潮』に発表された。テキストはこの初出を生かした『太宰治全集 第三卷』（筑摩書房 一九八九年十月二五日）を使用した。なお、本論における作品のテキストはすべて同全集を使用している。
- (2) 『お伽草紙』『浦島さん』『太宰治全集 第七卷』（一九九〇年六月二七日）一七五頁。
- (3) 『人間失格』『第一の手記』『太宰治全集 第九卷』（一九九〇年十月二五日）三一四頁。
- (4) 遠藤祐氏「〈走る〉ものの物語——「走れメロス」について」。『太宰治の《物語》』（翰林書房 二〇〇三年一〇月一〇日）一二三頁。遠藤氏のご指摘は還路を想定されたものだが、この「十里」については象徴的な距離としてとらえた方が良いように思う。
- (5) 田中実氏のご指摘のように、ディオニスが無意識のうちにメロスの帰還を待っていたとすれば「王はメロスの来るのを拒むはずはなく、山賊に命じることもない」し、帰ってくるはずがないと信じていたとすれば「山賊を差し向けたと考えること自体に意味がない」。「お話を支える力」。『小説の力』（大修館書店 一九九六年二月二〇日）一三五頁。山賊が王の命令で襲ったのか否かは所詮不明であるが、王の命令であると判断することに根拠がないことは確かであろう。
- (6) ただし、メロスが己の変化とその意味を明瞭に意識していたとは言えない。それを認識することができるとすれば、それは素朴な一牧人であるメロスよりは、むしろディオニスであろう。
- (7) 遠藤祐氏前掲論文一三九頁。遠藤氏はこの「清水」を、「ヨハネによる福音書」第四章十節の表現を借りて、「聖なるものの意志」の融けこんだ《活ける水》^{ミツ}であると指摘されている。核心を突いたご指摘であると思う。